

生存科学研究 ニュース

VOL. 8. NO. 3. 1993. 5. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3553-3518

会員研究会「生死と生存」第4回 日本と世界の湖沼環境問題 —人と湖の共存のために—

3月12日(金)、「生死と生存」会員研究会が滋賀県琵琶湖研究所にて開催され、表記のテーマで大阪市立大学名誉教授、琵琶湖研究所所長吉良竜夫氏が以下の内容の発表を行った。

現在、水環境は世界の環境問題の中でも重要なものの一つとなっている。地球規模で見ると、淡水の存在量は極めて少ないものであるが、その中で、湖沼のウエイトは大きく、今日では従来と異なり、人間の生活用水として使われることが多くなってきた。その意味もあり人工湖などが増えてきた。その湖沼環境の劣化は、先進国、発展途上国を問わず問題となっており、解決が急がれている。湖沼の6大環境問題としては、土砂の流入による堆積、水位の低下、酸性化、毒性物質による汚染、富栄養化が挙げられる。これらのすべてが極端に進行すると、生態系の破壊、生物の多様性の喪失を招く。

琵琶湖の富栄養化の経過を例にとると、1920-30年代の繊維工業の集中、1950年代の高度成長、滋賀県の工業化・都市化の進行、1960年代の水質悪化、プランクトン量の増加、水道水のカビ臭発生、その後の淡水赤潮

出現、アオコ発生などがあつた。しかし世界的にはもっと深刻な例があり、例えばスイスのボーデン湖は琵琶湖と比較して劣化の程度は遙かに大きい。湖のような問題の解決への手がかりとして、琵琶湖における環境浄化の試みもあるが、中国・欧米での湖沼環境の劣化の問題には、水文化の相違を考慮に入れる必要がある。

今回は東京を離れて開催したにもかかわらず、関西のみならず関東、北陸などから14名の会員が参加した。

当日研究会終了後、また4月3日(土)には「生死と生存」委員会が開催され、平成5年度もしばらく植物学を中心に生態学との関連で研究を進めるが、動物学にも言及していくことが相談された。

(なお、今回の会員研究会が第4回です。委員会を第1回と数えたためにニュース既報分は一回分づつずれてしまいました。お詫びして訂正をお願いいたします。)

第5回 生存秩序と人間関係研究会 現代世界とリストラクチャリング

3月22日(月)午後6時より、八千代国際大学経済学部高瀬浄教授が表記のテーマで発表した。その概要は以下のとおり。

「秩序」には「システム」でなく「レデュ

ム」というコンセプトを使いたい。前者は法則的解明であり、後者は原理的解明である。後者の解明にはとりわけ社会性が重要な意味をもつ。機能的相互連関より構造的機能連関が重要である。

現代は「振り返れば未来が見える」というほど単純な時代ではなく、その潮流はパラダイムの転換を包摂する混沌とした時代といえる。近代は、進歩・成長が善であるという歴史認識・社会認識のもとに、還元主義的二元論の世界像で、機能性、経済性、効率性の価値観が支配した。今それが壁にぶつかり「予定調和的進歩」や「無限成長」といったコンセプトは説得力を失い、「汚染なき進歩」や「地球規模の相互連関の時代」に移ってきた。先進諸国では物質文明が成熟期に達し、未来にむかって進むという時間軸（通時態）からなる観念が希薄化し、空間感覚（共時態）が再浮上してきている。大量生産、大量消費のフォード・システムがいつまでも続くことが許されるのか。生産ではなく配分に重きを置くようになってきた。技術革新による生産性の向上で配分の上昇を狙うこともできるが、配分のあり方によっては新たな社会的不公正が生まれる。

一方では「機械の時代から生命の時代へ」と科学技術の発展軸が変わろうとしているが、そうすれば知の構造や学問の再構築が不可欠となる。19世紀は階級的対立という視点で社会科学は見てきたが、20世紀は学問全体が有機的に繋ってシステム化してきた。進歩・成長から定常化・成熟へとパラダイムシフトが求められ、そのソフトランディングが20世紀末のリストラクチャリングのポイントである。これこそが今後の生存への基本的な条件ではなかろうか。成長と定常化とは綱引の葛藤のなかにあるが、それがむしろ必要であり、そこから新しい理念が生まれる。

20世紀末は進歩から配分へと変化が求められるが、配分では正義と公正が問題となる。体制（理論）類型（歴史的比較）階級

（政策）という概念構成だけでは充分でない。市場経済では物の豊かさのなかに心の不安が生まれる。西欧的近代知識は近代自然法の考えによる。その前提を見つめるとコスモロジーが問題となる。それを形成する独自の価値観がある。

そこでどう考えるのか。競争と効率の経済システム、公正と正義の政治システム、協調と調和の社会システムと、その全てが重なる共存の世界を含む「総合的政策体系」や、政治、経済、宗教、芸術、科学、哲学、人倫を包摂するコスモスとしての「文化諸領域の統合システム」を考えている。この価値観は構造連関、発展連関、価値連関があり、ここに文明の構造と変動と基本的枠組がある。その社会的歴史的考察が必要であり、自然生態的事実、生産構造、環境科学、生命科学からの生命の再生産を考え、その総合を価値観で行う。これが人倫である。人間の価値観、それが生存の理法であろう。価値観は文化から生まれる。文化の中心には宗教がある。排除の理論ではやれなくなる。多様を統一する知恵、それはアジアにあるのではなかろうか。

今回は、研究会メンバーの他、板垣、向山両顧問も出席され、活発な討議が行われた。

第5回 医薬問題研究会 第2次 医療法改正

4月16日（金）午後3時より表記研究会が開催され、厚生省保健医療局企画課松本義幸氏が「改正医療法、政省令事項等の主な内容」と題し、また厚生省薬務局池谷荘一氏が「医療法改正の概要、医薬品を囲む環境の激変」と題して夫々発表を行った。

松本氏は、医療法が昭和23年に制定されたまま40年近くも放置されてきたこと、昭和60年に第1次改正が行われ、医療圏の設定と地域医療計画が盛り込まれたこと、平成4年から第2次改正が一部実施され、今年から全面的に施行されたこと等を紹介してか

ら、日本の医療は量的レベルでは世界的水準に達したが内容が問題であり、これからは治療からGL志向に向かい、医療と保健と福祉のコーディネーションや大病院への患者集中、医療費の適切化が問題となると、今回の改正の背景を説明し、特定機能病院、療養型病床群等について解説した。医療法改正は健康保険法や老人医療法とは別に医療のあるべき姿から発想されてはいるが、健康保険法や老人保健法のほうが先行した部分もあり、そのために狙いが誤解されたり、細部についての分かりにくさがあることを指摘した。

池谷氏は、今回医療法改正の概要を説明した後、今回の改正で、医療の担い手として医師、歯科医師、看護婦とともに薬剤師が明記されたことを指摘し、それに伴う義務の増大に注目しなければならないことを強調。ついで、提出資料に基づき、今後の医療費の増大のインパクトで製薬企業、薬局、薬剤師がどう影響を受けるか、またそれにどう対処すべきかについての見解を披露した。

第6回東西の健康観・医・薬研究会 東洋的老いはあるか？

3月11日(木)午後、表記のテーマで、自治医科大学看護短大新村拓氏と前東京慈恵会医科大学精神科教授新福尚武氏が、それぞれ「文化としての老い」「近代人にとっての老い」と題して発表した。概要は次号紹介。

東北プロジェクト 安家研究会 安家の明日を考える会

3月28日(日)、「安家の明日を考える会」第5回が安家成人大学の名のもとに開催され、住民との対話が行われた。会議では、生存研小泉浩郎会員(東北農林試験場)が『*「わ」そう・安家の里*』と題して発表し、その話題を巡って対話がなされた。

小泉委員の発表の概要は、まず、現在の農業・農村の問題点として、「むら」を離れる

若者、老人百姓から老人ホームへ、拡散する家族、食卓のない家庭、見知らぬ人々の「むら」等を指摘し、その潮流のなかでもどの家にも後継者とお嫁さんのいる瀬戸内海の小さな島、愛媛県松山市釣島を紹介、次いで、明日を開く道として、農耕型(定住)社会、都市型(高移動)社会、田園型(定住・交流)社会の視点から時代を読むこと、「土地がない」「担い手がない」「物が余っている」「だから農場は駄目だ」という常識を破ること、付加価値農業、自給農業、いきいき農業へと発想を転換させることを提唱し、「*「わ」そう・安家の里*」として、自治と共生の里熾し、住民主体・地域合理・生活中心の里熾しの基本、働き方の革新(アイデアを生かし、技を磨き、コストに学ぶ)、暮らしからの革新(風土を生かし、余裕を持ち、手作りを楽しむ)、遊び方の革新(趣味を生かし、仲間を広げ、地域と結ぶ)を呼びかけた。

最後に、人間としての生き方、生活の潤い、経済の豊かさを目標として、暮らしのたて方、自然の恵み、ここに住むことの楽しさ、食べ物、危険や疑問な環境、保健・医療等を点検し、安家の自慢話・そのシンボルはなにか、次の時代に何を引き継ぐのかを、歩きながら考えようと結んだ。

別府市の総合調査研究の基本構想 —「人間性回復都市べっぷ」の 実践的展開のための報告書—

3月末、九州プロジェクトの一環として行われてきた生存研と別府市との共同研究の表記報告書が完成した。この研究は、より実践的、総合的、広域的な視点から、平成5年度は船舶振興会の補助も得て続けられる。

九州プロジェクト 健やかに生きるまち肝属郡 プロジェクト：第1回研究委員会

平成4年度の肝属研究会(肝属郡保健医療

プロジェクト)が、平成5年度は船舶振興会の補助を受けての「総合科学的手法に基づく都市づくりの調査研究」の一環として、「健やかに生きるまち肝属郡プロジェクト(仮称)」と改名再出発し、4月19日(月)午後2時より開催された。

プロジェクトの目的は、肝属郡医師会病院に保健センターを併設し、肝属郡の健康生活を充実させ、あわせて、自然環境、文化環境、産業環境の整備も考慮し、根占、大根占、田代、佐田の諸町がより健やかに生きるための諸条件を、実践的成果を目指して総合科学的に検討することである。

第1回は、新たなメンバーもいるため、肝属医師会病院今隈院長から肝属郡の諸事情、肝属医師会病院の保健医療活動、それらの問題点をあらためて伺い、またこれまでのメンバーがこの研究会関連のこれまでの検討経過を説明した。

これに関連した討議のあと、今後の進め方について協議し、肝属郡4町の住民や自治体、鹿児島県、鹿児島県医師会にも協力を得るよう努力しながら進めることが合意された。

平成4年度第3回理事会
同 第2回評議員会

3月29日(月)午後2時より、平成4年度第3回理事会が開催され、熊谷洋前理事長の後任理事長選出が行われ、全員一致で中尾副理事長を選出し、理事長就任を依頼した。しかし中尾副理事長は諸般の状況から、副理事長のまま理事長職を行い次の理事長選任まで全力を尽くしたいと申し出られ、全員一致でそれを了承した。

次いで午後2時30分より、理事会、評議員会合同で会議が続けられ、平成5年度事業計画、収支予算案が審議され、全員異議なく了承された。

公益信託武見記念生存科学研究基金
第24回運営委員会

3月25日(木)第24回(平成4年度第3回)運営委員会が開催され予算審議の後、熊谷洋運営委員長ご逝去による欠員の補充として板垣興一氏が推薦され、同時に全員一致で同氏が新運営委員長に選出された。

研究所日報

3月22日(月)別府市報告書作成会議

3月25日(木)武見記念生存科学研究基金運営委員会

3月29日(月)生存科学研究所理事会

4月1日(木)編集小委員会

4月15日(木)ビデオ『生存』上映

4月23日(金)川崎病研究委員会

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者 吉田フェロー

Takemi Program Seminar

2/22 Fighting Smoke with Fire—Public Health Approaches to Control Tobacco Use / G.Connolly

3/1 Fixing America's Health Care System :Lessons from Other Countries / H.Hiatt

3/9 Contexts of Female Health in Sub-Saharan Africa/ K.Heggenhougen

3/17 Creating a Public Health System for Unrecognized Palestinian / H.Kanaaneh

3/22 Sociology of Community Based Health and Human Services/ L.Prado

4/5 Health and Private Sector/P.Berman

4/12 Chagas Disease Cardiomyopathy in Honduras / M.Santos-Sierra

Takemi Luncheon

2/18,2/25,3/18 Research Update

/D.Obikeze,M.Deng,P.Mohankumar

3/4,3/11,4/8,4/15 Weekly Luncheon

3/25 Cross National Comparison of Rural Health Services / M.Prakasanna